

実習報告（基盤実習）

深い学びの実現を目指した中学校英語科の授業開発 — 逆向き設計の理論を足場として —

原 功光（授業実践探究コース）

【探究実習のテーマと設定の理由】

平成29年度新学習指導要領において、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業改善が求められている。この中の深い学びについて、以下のように定義されている。「習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けたり深く理解したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか」と示されている（文部科学省、2017）。このことから、深い学びには、自ら問題を見つけ、解決するために生徒同士で考えを構築し、学びを深めていくことが必要となる。この学びを実現するために、石井（2015）は、学校教育で育成すべき資質・能力を3つの視点で構造化し捉えられている。①知識の獲得と定着（知っている・できる）②知識の意味理解と洗練（わかる）③知識の有意味な使用と創造（使える）、これらの3つのレベルの相互関係を示している。また、この「使える」レベルの学力は、教科学習における「真正な学習」を通して育つものとしている（石井、2015）。つまり、この3つの知の構造を基にした深い学びを実現させることで、知識を単に知っているだけに留まることなく、学んだ知識を理解し活用する力を育成することにつながる。

しかし、中学校英語科における指導力の課題として、「コミュニケーション能力の育成を意識した取り組み、特に「話すこと」及び「書くこと」などの言語活動が十分ではないこと」などがあげられる（文部科学省、2017）。また、このような指導力の課題から、佐賀県学力状況調査の結果（2021）においても「思考力・表現力・判断力等」の正答率が低い。このことは、石井が述べる教科の中で「使える」レベルの学力に達成していないと省察する。このような現状から、生徒に「使える」レベルの学力を身につけ、単元を通じた永続的理解を促すことが必要であると考え。そのため、単に、英単語や文法規則を知るだけでなく、どう使うのか、どのように表現すればよいのかなど疑問を持ちながら、学びを深めていく必要がある。

そこで、中学校英語科における深い学びを実現させるべく、逆向き設計の理論を足場とした単元づくりを行っていきたい。逆向き設計に基づけば、英語の学習は英語表現の反復練習や言い換え練習のみに終わらず、学んだ表現を実際にどのような場面で何のためにどう使うかを問う課題を指導計画に位置づけることができる。このような逆向き設計による単元デザインが深い学びを実現させる一手立てとなると考える。

【探究実習の研究目標】

- 探究実習を通し、逆向き設計の単元構成を行い、教師としての指導力向上を図る。
- 探究実習を通し、生徒が言語活動を通し、思考し自ら伝え合うことのできるパフォーマンス課題の開発とルーブリック評価を検討する。

【探究実習の概要】

8月29日から9月16日の10日間、10月4日から12月20日の隔週火曜日の10日間実習を行っ

た。主な内容として、配属学年は中学校 1 年生であったが、実習校が小規模の小中一貫校であったため、全学年の授業や、小学校の授業参観や行事にも参加させていただいた。主な実習内容は、授業参観と授業実践である。内容は、教科書「Unit9 “Think Globally and Act Locally”」である。

【探究実習の成果と課題】

探究実習の成果としては、以下 2 点があげられる。

第一に、生徒の実態把握と信頼関係である。実習校は、小中一貫校でもあったため、中学校だけでなく小学校の外国語も T2 や授業参観を行い、小学校の児童の様子と中学校の生徒の授業での様子を比較しながら児童生徒の英語学習の実態把握を行うことができた。授業参観では、中学校で逆向き設計を基にした単元づくりが行われており、単元ごとに目標を提示し、生徒が見通しをもちながら授業を受け学習課題に取り組む姿が見られた。

第二に、授業実践で取り扱った単元設計シートの活用である。今回の実践で、林・大久保（2020）の授業設計シートを参考に単元を作成した。石井（2015）が述べる 3 つのレベルに単元で身につけさせたい力を具体化し単元を作成した。単元を通し俯瞰的に育成すべき力を捉えることができ、計画的に授業を行うことができた。しかし、教師が計画したのみであり、生徒と共有していなかった。生徒と共有することで、より具体的に見通しをもち、使えるレベルの学力を身につけることができると考える。

一方課題は、授業実践である。授業設計シートを作成し、パフォーマンス課題を設定した単元を作成したが、使えるレベルの学力の定義が曖昧であり、単元を通した深い学びではなくスピーキングテストのため単元となってしまった。単元ごとにパフォーマンス課題を設定することが難しく、今回の実習では、教科書の文脈に沿わない学習課題を設定してしまった。また、学習課題の内容も、ビデオレターの内容を聞き、自分の考えを英語で伝えるという内容を設定した。中学 1 年生での実践であったため、生徒の実態に応じた課題を設定することができなかった。そのため、得意な生徒は積極的に参加したが、苦手な生徒への支援は十分ではなかったと省察する。単元で授業を構成していく際には、目標と生徒の育成すべき力は何かを教師が考え、年間を通した目標やそれに照らし合わせたルーブリック評価を設定し、単元作りをしていくよう考えなければならない。今後の改善点として、生徒の実態に応じた授業づくりや単元づくりをしていく必要がある。単に深い学びを実現するのではなく、生徒一人ひとりに深い学びを実感し、その子に応じた学びを還元していくことが考えられる。特に中学校から英語を苦手意識する生徒が増えてくる。少しでも英語がわかり、実生活に活用できる力を感得できるような場面や学習課題を設定し、単元を通した深い学びが実現できるような単元づくりに務めていきたい。

引用参考文献

- ・石井英真（2015）『今求められる学力と学び—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影—』日本標準.
- ・林祐子・大久保凜（2020）「逆向き設計による外国語の授業づくりについて—中学校外国語科「逆向き設計シート」に基づく考察—」『佐賀大学教育学部実践研究紀要』第 1 号， 4 巻 131-146.
- ・文部科学省（2017）「学習指導要領（平成 29 年度告示）外国語編」東洋館出版社.
- ・令和 3 年度佐賀県英語教育改善プラン(2021)https://www.mext.go.jp/content/20210602-mxt_kyoiku02-000015671_41.pdf（最終閲覧日：2022 年 1 月 27 日）